

高次脳機能障害のクライアントへの支援

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
西畑 洋平

本研究で、小児脳腫瘍の晩期障害として高次脳機能障害を呈した事例に対して、課題を行っていきながら研究参加者がどのような特徴の問題を抱えているかを明らかにすることを旨とするとともに、おこなったアプローチが効果的を検証していくことを目的として行ったものである。

この研究に参加したクライアントは来談当初に行ったアセスメントにおいて、主に言語の抽象機能の側面と記憶の側面に問題があるとうかがわれたため、この2つの側面に対するアプローチを行った。

アプローチは筆者とクライアントの二人で課題を行う個人セラピーを行った。個人セラピーでは3つの課題を行い、分類課題は与えられた情報から特性を抽出し、共通するものはまとめ異なるものは切り離せるようになることを目指して行われ、主に抽象機能の問題へのアプローチとして行った。書き取り課題と聴き取り課題は主に記憶の問題へのアプローチを目的として行われた。個人セラピーは計23回行った。17回目から院生を一人加え、三人構造で課題(主に分類課題)を行っていった。また個人セラピーと並行して、臨床心理士や筆者、他の院生、研究員らで構成されるグループのなかで課題を行うグループセラピーを行った。グループセラピーでは、メンバー同士の互いの理解とサポートを経験することや自発性の向上を期待して行った。まグループセラピーは計8回行った。

課題を行っていく経過からみられたクライアントの特徴として明らかになったのは、日常生活において自分が行動する文脈において物事をとらえる傾向が強いことや、ワーキングメモリーの容量が小さいこと、文章の構造をとらえる力が弱いということなどであった。

また、今回行ったアプローチはクライアントの問題点に対して改善の効果はみられなかったが、書き取り課題において課題文を意味のまとまりで区切る介入を行うと課題の成績が安定するようになるなど、何らかの補助をいれることでC1の特徴の変化がみられた。